

コロナ禍の在宅看護論代替実習において フィールドワークを取り入れたことによる学修成果

Learning Outcome of adopting field work in the alternative practicum of Homecare Nursing under the COVID-19 pandemic.

真 溪 淳 子 ・ 高 橋 由 美

MATANI Junko,

TAKAHASHI Yumi

キーワード：コロナ禍，在宅看護論実習，フィールドワーク，学修成果

Key words：COVID-19 pandemic, Homecare Nursing Practice, Field Work, Learning outcome

要 旨

本研究は、コロナ禍の在宅看護論代替実習においてフィールドワークを取り入れたことによる学修成果を明らかにし、2022年度改正カリキュラム「地域・在宅看護論」の教授法への示唆を得ることを目的とした。課題レポートより、フィールドワークからの学びに関連付けられる内容を分析した結果、【地域を捉える視点の獲得と地域生活の理解】【地域の把握と生活者の視点に基づく在宅看護の実践】【地域力を高めるための連携と協働】【看護の役割認識の拡大と継続看護への意欲】の4コアカテゴリを生成した。学生はフィールドワークを通して、地域を捉える視点を獲得し地域生活を理解することができていた。また、療養者・家族を生活者として捉える視点に基づき在宅看護を実践する必要性を理解し、地域や暮らしを把握することが在宅看護の目的である療養者・家族のQOL維持・向上支援につながることを学んでおり、今後の「地域・在宅看護論」においても活用可能であることが示唆された。

Summary

The purpose of this study was to clarify the learning outcome of incorporating fieldwork in the alternative practice of homecare nursing under the COVID-19 pandemic, and to obtain suggestions “Community/Homecare Nursing Theory” in new curriculum. From the student’s reports, four contents were categorized by the content analysis method. The four core categories includes “acquisition of perspective to grasp the community and understanding their life”, “practice of home nursing based on the viewpoint of community residence”, “cooperation and collaboration to enhance the local community power” and “expansion of awareness of the nursing role and willingness to continue nursing”. Through

the fieldwork, students learned understanding the importance of community and lifestyle will lead the support for maintaining and improving the QOL of the recuperator and their family. It was suggested that these categories would be beneficial in the new curriculum “Community/Homecare Nursing Theory”.

I. はじめに

2020年度よりコロナ禍の影響を受け、殆どの臨地実習は学内または遠隔による代替実習を余儀なくされた。在宅看護論実習では教材や指導方法を工夫することにより、到達目標を下げることなく対応することができた。学生の授業改善アンケートにおいても満足度を示す評価は高かったが[1]、地域の看護活動の実際を学ぶ機会が少ないということが課題であった。2021年度に入ってもコロナ禍が続き、引き続き代替実習による対応となった。そこで、受け持ち事例が暮らす地域を想定したフィールドワークを取り入れ、看護の視点で地域を把握することによる気づきや学びを期待することとした。

フィールドワークは、学士看護学基礎教育の重要な教育内容として位置づけられ、地域看護学教育内容として、地域診断・地区診断の多様な実習演習教育プログラムが展開されている[2-5]。

2022年度改正カリキュラムでは、超高齢社会における疾病構造の変化、療養の場の多様化、地域包括ケアシステムの推進という背景のなか、多様化・複雑化するケアニーズに対応できる看護職者を育成することが求められている。「在宅看護論」は「地域・在宅看護論」へと名称が変更となり、基礎看護学に続く位置づけとして、低学年から地域に暮らす人々の理解とそこで行われる看護の学びの強化に向けて授業内容の充実を図る必要性がある[6]。3年課程のカリキュラムにおける実践例はまだ少なく[7-9]、独自の地域特性を生かした取り組みや実習フィールドの開発が急務となっている。

以上のことにより、本研究の目的は、コロナ禍の在宅看護論代替実習においてフィールドワークを取り入れたことによる学修成果を明らかにし、

今後の「地域・在宅看護論」を教授するうえでの示唆を得ることとする。

II. 研究目的と意義

コロナ禍の在宅看護論代替実習においてフィールドワークを取り入れたことによる学修成果を明らかにする。フィールドワークの学修成果を明らかにすることにより、新カリキュラムにおける「地域・在宅看護論」の教授法への有用な示唆を得ることができる。

III. 研究方法

1. 用語の定義

フィールドワーク

先行文献[2]を参考に、人々が生活している住居や街並み、暮らしぶりなどを観察する地区視診も含めてフィールドワークとする。

2. 在宅看護論代替実習の概要

実習のスケジュールを表1に示した。概ね半日の対面実習と遠隔実習であった。

代替実習での課題を設定し、課題1は在宅看護論実習の主要なキーワード12語の学習、課題2は紙上事例による訪問看護過程展開、課題3は在宅ケアシステムや多職種連携と看護の考察、課題4は国家試験で問われる臨床判断力への対応、課題5は在宅看護における緊急時・災害時への対応とした。

1週目訪問看護ステーション実習4日間のうち、1日目は訪問看護ステーションの見学または学内で実習指導者の講義を受けた。3日間は、学内の模擬訪問看護ステーションで、紙上事例(ALS療養者、50歳代、男性)を用いて訪問看護過程を展開した。

2週目通所施設実習2日間の対面実習では、

表1 在宅看護論代替実習実習（遠隔・対面実習）スケジュール

		午前／午後	1・2限	3・4限
1週目	月	対面／	オリエンテーション カンファレンス 課題1	
	火	対面／遠隔	訪問看護ステーション見学	課題2 訪問看護過程 DVD 学習
	水	対面／遠隔	模擬訪問看護ステーション 演習：同行訪問	課題2 訪問看護過程
	木	対面／遠隔	模擬訪問看護ステーション 演習：援助の実際	課題2 DVD 学習
	金	対面／遠隔	模擬訪問看護ステーション 個別指導	課題2 訪問看護過程
2週目	月	対面／	カンファレンス	
	火	対面／遠隔	フィールドワーク	課題3 DVD 学習
	水	対面／遠隔	重度心身障害児通所施設リモート実習	課題3 DVD 学習
	木	対面／遠隔	課題4・5	実習課題確認 記録整理
	金	遠隔／対面	実習課題確認 記録整理	カンファレンス 自己評価・面談 記録提出

フィールドワークおよび重度心身障害児通所施設とのオンライン実習を行った。

3. フィールドワークの実際

金川〔3〕の地域看護診断の技法を参考に「フィールドワークガイドライン」および「フィールドワーク記録」を作成した。実習目標は、療養者と家族の健康や暮らしを支援するために、生活の基盤である地域を理解することとした。紙上事例が暮らしている地域と想定し、ガイドラインを基に大学周辺エリアを1時間程度見てまわり、フィールドワーク記録に情報や学びを整理することにした。地域の情報として、区役所ホームページのまち歩きマップ〔10〕を活用した。カンファレンスでは、フィールドワークでの気づきや学びを共有し、看護過程や地域連携における課題に反映できるよう指導した。

3. 研究対象

2021年度在宅看護論代替実習を行った看護学科3年生86名の課題レポートを対象とした。

課題レポートは、「在宅療養者やその家族のセルフケア能力やQOLを高める支援について学んだこと」をテーマに、2,000字程度として実習最終日に提出を受けた。提出があった中から、フィールドワークからの学びに関連付けられる内容の記載があった64名の課題レポートを分析対象とした。

4. 分析方法

課題レポートの記述内容を本研究2名で分析した。

記述内容からフィールドワークからの学びに関連付けられる内容を文脈単位に整理した。次に意味が読み取れる単位に整理・コード化し、類似するコードを抽出してサブカテゴリ化した。さらに抽象度を高め〔サブカテゴリ〕から《カテゴリ》へ、《カテゴリ》から【コアカテゴリ】へと抽象化を繰り返す作業を実施した。分析の妥当性と信頼性を確保するために、研修者間で慎重に検討し、意見の一致を得られるものを採択した。

5. 倫理的配慮

在宅看護論代替実習の課題レポートを使用するにあたり、実習評価終了後、学生に使用目的と個人が特定されないこと、協力への同意は任意であり、後から撤回しても実習評価に不利益を受けることはないことを口頭と文書で説明し全員の同意を得た。

IV. 結果

課題レポートの記述から、フィールドワークからの学びについて、36サブカテゴリ、11カテゴリ、4コアカテゴリが生成された（表2）。以下、コアカテゴリを【 】、カテゴリを《 》、サブカテゴリを〔 〕として示す。

学生は紙上事例が暮らしている地域として想定

表2 在宅看護論代替実習にフィールドワークを取り入れたことによる学修成果

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
地域を捉える視点の獲得と地域生活の理解	地域を捉える視点を持ち、療養者の視線で地域を見る	療養者の目線で街を歩き、五感を使って地域の状況を把握する
		地域を捉える新しい視点（地区視診ガイドライン）を習得し視野が広がる
		見過ごしていた地域の生活環境に気づく
	地域の中にある暮らしと健康を認識する	療養者・家族の生活環境を捉える
		地域環境から地域住民の生活・健康課題を推察する
	地域と暮らしは密接不可分の関係にある	暮らしは居宅内でのみ営まれているわけではなく地域と密接につながっている
		まち並みの中に療養者・家族の生活を知り得る手掛かりが隠れている
		ライフステージやスタイル、価値観や健康状態により地域での暮らしやすさが変わる
		地域特性は地域住民の QOL に影響する
地域の把握と生活者の視点に基づく在宅看護の実践	療養者・家族は「生活者」として地域で暮らしている	地域を見ることにより療養者・家族の生活を想像することができる
		療養者・家族は地域で日々の生活を営んでいる
	地域特性は療養者・家族の健康と生活に影響をもたらす	健常者が不自由なく生活する地域環境でも高齢者や障害者に危険や不便をもたらす
		近隣住民との交流機関の減少により療養者・家族の引きこもりや孤立につながる
		療養者・家族の存在を近隣住民に理解してもらうことで協力や支援が得られやすい
		地域住民同士のつながりの有無が療養者・家族の生活や健康状態に影響する
		地域特性が生活や健康に与える影響は非常に大きい
	地域を把握し療養者・家族のアセスメントに活かす	療養生活を支援するために地域を知り情報収集を行う
		在宅看護には地域アセスメントが必要である
	予測されるリスクや災害に向けて予防的な支援を行う	地域特性から起こり得る健康や生活のリスクを推察し予防的支援を行う
		地域の状況に合わせた災害発生時の避難行動を療養者・家族と共有し確認する
	地域特性に合わせて療養者・家族の QOL の維持・向上を支援する	療養者・家族の生活・健康課題を明確化し、療養者・家族が望む生活を支援する
		地域の状況に合わせた安全・安楽な支援を工夫する
		地域のストレングスを最大限に活用する
		地域に存在する社会資源等に関する情報提供は療養者・家族に安心感をもたらす
		療養者・家族と近隣・地域住民の交流を後押しする
		療養者・家族の生活に適した個別性の高い支援を提供する
		地域特性を踏まえた支援は療養者・家族の QOL に有益である
地域力を高めるための連携と協働	地域ケアシステムの構築と多職種多機関連携は療養者・家族への質の高い支援につながる	地域に多くの社会資源が存在し療養者・家族の生活と健康を支えている
		多職種・多機関連携により療養者・家族への質の高い支援につながる
		療養者・家族の安心・安全な療養生活の継続に地域包括ケアシステムは不可欠である
	誰しものが暮らしやすいまちづくりを地域住民・関係多職種とともに協働する	関係多職種、地域住民、ボランティア等との協力体制の構築が必要である
		新たな地域サービスの創出も看護師の役割である
看護の役割認識の拡大と継続看護への意欲	退院後の患者の地域生活を見据えた継続看護に取り組む	「退院がゴールではない」という視点を持つ
		退院後の療養生活に必要なサービス等を検討するため地域の状況把握が必要である
		入院中から患者の退院後の療養生活を視野に入れた支援を行う

した大学周辺エリアをガイドラインに基づき見てまわり、【地域を捉える視点の獲得と地域生活の理解】を深めることができた。学生自身の目で見た地域と紙上事例の暮らしを重ね合わせ【地域の把握と生活者の視点に基づく在宅看護の実践】について考えることができ、さらに、療養者と家族のみならずあらゆる地域住民のより良い暮らしに通じる【地域力を高めるための連携と協働】の必要性を捉えられた。また、地域生活と健康のつながりを理解できた学生は、これから看護師として就労する上での【看護の役割認識の拡大と継続看護への意欲】を持つことができていた。以下、各コアカテゴリについて説明を行う。

1. 地域を捉える視点の獲得と地域生活の理解

【地域を捉える視点の獲得と地域生活の理解】は、《地域を捉える視点を持ち、療養者の視線で地域を見る》、《地域の中にある暮らしと健康を認識する》、《地域と暮らしは密接不可分の関係にある》の3カテゴリであった。

学生は「地域を捉える新しい視点（地区視診ガイドライン）を習得し視野が広が」り、かつ、紙上事例の「療養者の目線で街を歩き、五感を使って地域の状況を把握する」ことで、これまで「見過ごしていた地域の生活環境に気づ」き、《地域を捉える視点を持ち、療養者の視線で地域を見る》経験を得た。そして、紙上事例の「療養者・家族の生活環境を捉える」経験を通し、普段意識していなかった「地域環境から地域住民の生活・健康課題を推察」して、《地域の中にある暮らしと健康を認識する》ことができた。

また、学生は地域生活を感じ取ることにより、「暮らしは居宅内でのみ営まれているわけではなく地域と密接につながっている」ことを実感し、「まち並みの中に療養者・家族の生活を知り得る手掛かりが隠れている」ことに気づいた。地域を歩きながら療養者の生活を想像する中で、同じ地域に暮らす地域住民であっても、「ライフステージやスタイル、価値観や健康状態によって地域での暮らしやすさが変わる」ことを察知し、「地域

特性は地域住民のQOLに影響する」こと、つまり《地域と暮らしは密接不可分の関係にある》ことを認識できた。

2. 地域の把握と生活者の視点に基づく在宅看護の実践

【地域の把握と生活者の視点に基づく在宅看護の実践】は、《療養者・家族は「生活者」として地域で暮らしている》、《地域特性は療養者・家族の健康と生活に影響をもたらす》、《地域を把握し療養者・家族のアセスメントに活かす》、《地域特性に合わせて療養者・家族のQOLの維持・向上を支援する》、《予測されるリスクや災害に向けて予防的な支援を行う》の5カテゴリであった。

学生は療養者の視線で「地域を見ることにより療養者・家族の生活を想像することができる」ことに気づき、「療養者・家族は地域で日々の生活を営んで」おり、《療養者・家族は「生活者」として地域で暮らしている》という視点を得た。「生活者」の視点を持った学生は「健常者が不自由なく生活する地域環境でも高齢者や障害者には危険や不便をもたらす」可能性や「近隣住民との交流機関の減少により療養者・家族の引きこもりや孤立につながる」恐れがあることに気づくと同時に、「療養者・家族の存在を近隣住民に理解してもらうことで協力や支援が得られやす」くなり「地域住民同士のつながりの有無が療養者・家族の生活や健康状態に影響する」ことを捉えた。「地域特性が生活や健康に与える影響は非常に大き」く、《地域特性は療養者・家族の健康と生活に影響をもたらす》ことを認識した学生は、「療養生活を支援するために地域を知り情報収集を行う」ことの有用性を理解し、「在宅看護には地域アセスメントが必要であ」り、《地域を把握し療養者・家族のアセスメントに活かす》ことの重要性を認識できた。

加えて、学生は「地域特性から起こり得る健康や生活のリスクを推察し予防的支援を行」い、「地域の状況に合わせた災害発生時の避難行動を療養

者・家族と共有し確認する] ことによって、《予測されるリスクや災害に向けて予防的な支援》が可能になることを捉えた。また、「療養者・家族の生活・健康課題を明確化し、療養者・家族が望む生活を支援する」ためには、「地域のストレングスを最大限に活用」し、「地域の状況に合わせた安全・安楽な支援を工夫する」ことによって、「地域特性を踏まえた支援は療養者・家族のQOLに有益」となることを察知した。「療養者・家族と近隣・地域住民の交流を後押しする」ことや「地域に存在する社会資源等に関する情報提供は療養者・家族に安心感をもたらす」は、「療養者・家族の生活に適した個別性の高い支援を提供する」ことに繋がり、《地域特性に合わせて療養者・家族のQOLの維持・向上を支援する》ことの重要性を認識できた。

3. 地域力を高めるための連携と協働

【地域力を高めるための連携と協働】は《地域ケアシステムの構築と多職種多機関連携は療養者・家族への質の高い支援につながる》、《誰もが暮らしやすいまちづくりを地域住民・関係多職種とともに協働する》の2カテゴリであった。

学生は、「地域に多くの社会資源が存在し療養者・家族の生活と健康を支えて」おり、「多職種・多機関間連携により療養者・家族への質の高い支援につながる」ことを理解した。「療養者・家族の安心・安全な療養生活の継続に地域包括ケアシステムは不可欠である」ことを改めて認識し、《地域ケアシステムの構築と多職種多機関連携は療養者・家族への質の高い支援につながる》ことの深い理解につながった。加えて、「障害の有無にかかわらず誰もが暮らしやすいまちづくり」の実現に向けて、「関係多職種のみならず地域住民、ボランティア等との協力体制の構築が必要であり、地域の状況に合わせた「新たな地域サービスの創出も看護師の役割である」ことを認識することにより、《誰もが暮らしやすいまちづくりを地域住民・関係多職種とともに協働する》ことの重要性を捉えられた。

4. 看護の役割認識の拡大と継続看護への意欲

【看護の役割認識の拡大と継続看護への意欲】は《退院後の患者の地域生活を見据えた継続看護に取り組む》の1カテゴリであった。

学生は、地域の理解を通して、「[退院がゴールではない]という視点を持ち、患者の[退院後の療養生活に必要なサービス等を検討するため地域の状況把握が必要である]ことを認識した。学生は、看護師として「入院中から患者の退院後の療養生活を視野に入れた支援を行う」ことの必要性を理解し、《退院後の患者の地域生活を見据えた継続看護に取り組む》もうとする前向きな気持ちを抱くに至った。

V. 考察

課題レポートから見出した結果より、コロナ禍の在宅看護論代替実習においてフィールドワークを取り入れたことによる学修成果と今後の「地域・在宅看護論」の教授法への示唆について考察する。

1. コロナ禍の在宅看護論代替実習においてフィールドワークを取り入れたことによる学修成果

学生は、地域を捉える視点を獲得し地域生活を理解することができていた。また、療養者・家族を生活者として捉える視点に基づき在宅看護を実践する必要性を理解し、地域や暮らしを把握することが在宅看護の目的である療養者・家族のQOL維持・向上支援につながることを学んでいた。

地域と暮らしは密接につながっており、地域特性は地域住民のQOLに影響することや、生活・健康課題の認識や推察することの必要性を理解していた。さらに地域を把握することで、より個別性の高い支援が可能となり、日々のケアにリスクや災害に向けた予防的支援が必要になるか理解できていた。受け持ち事例のALS療養者が暮らす地域と想定したことで、療養者の視点で地域を把握することの必要性や地域のストレングスを最大限活用して療養者・家族のQOL維持・向上を支

授する必要性を理解できた可能性がある。

在宅療養における看護過程の展開技術に関する授業では国際生活機能分類（ICF）を用いて、「環境因子と「個人因子」の関係性や「環境因子」における強みに注目する必要性を教授している[11]。従来の実習では受け持ち事例の情報収集や訪問看護の実際を通して環境因子を把握することができていたが、2020年度の代替実習では紙上事例のみで、教育用DVDやカンファレンスで補うことも難しかった。フィールドワークをとり入れたことにより、学生は、「環境因子」における強みに注目する意味について理解し、療養者・家族のQOL維持・向上支援における看護の役割を具体的に学ぶことにつながった可能性がある。

加えて、地域に多くの社会資源が存在して療養者・家族の生活を支えていることを理解し、関係職種だけでなく地域住民やボランティア等と協働し、新たな地域サービスの創出も看護師の役割であると気づくことができていた。学生が看護過程を展開した事例はALS療養者であったが、その後のオンライン実習や教育用DVDにより地域で暮らす要介護高齢者や障がい者・児への看護支援の実際を学んでおり、それらの学びを統合することで、地域ケアシステムの構築と多職種多機関の連携の重要性を理解し、誰もが暮らしやすいまちづくりに参画して地域力を高める必要性を理解することにつながった可能性がある。

コロナ禍の在宅看護論代替実習においてフィールドワークを行ったことにより、対象の退院後の地域生活を把握することが、より質の高い支援につながることを理解し、退院支援や継続看護の必要性を学ぶ機会につながった。さらに、「退院がゴールではない」という視点を持ち、臨床から地域への継続看護に取り組む必要性が理解でき、看護の役割認識を地域に拡大させることにつながった可能性が示唆された。

水方らは[7.8]、地域を豊かにできる看護師育成を目指したカリキュラム編成に取り組み、1年次に学校所在地のフィールドワークを行い、看護学生としてできることを地域に還元しているこ

とや、全ての領域で地域実習ができる環境を整え、あらゆる場に看護があることを学び、地域包括ケアや多職種連携の視点を育成していることを報告している。学生は、フィールドワークで地域を観る視点を学ぶことにより、病院完結型の看護から地域完結型の看護の役割を認識し、対象が暮らす地域への継続看護の必要性や地域力を高めるための連携や協働の必要性を理解することにつながることができていた。在宅看護の対象は全ての領域に関連性を持っており、代替実習としてのフィールドワークにとどまらず、地域や暮らしを把握し、多様化・複雑化するケアニーズに対応できる看護師育成につなげるためのアプローチ法として継続する必要がある。

2. 2022年度改正カリキュラム「地域・在宅看護論」の教授法への示唆

学生はフィールドワークを通して、地域や暮らしを把握することが在宅看護の目的である療養者・家族のQOL維持・向上支援につながることを学んでいた。3年課程では在宅看護論実習と5領域の実習が並行して配置されている。そのためフィールドワークの授業を低学年次に取り入れることで、学修成果を他の領域実習に活用できる可能性がある。先行研究では2年次の地域共生型サービスでのフィールドワークが、地域で暮らす人々の理解と看護の役割理解につながり、教育的アプローチ法としての有効性が報告されている[9]。2022年度改正カリキュラム「地域・在宅看護論」では、地域で生活する人々とその家族の健康と暮らしを理解し、支える能力を強化し、地域包括ケアシステム等を推進するための能力強化が求められている[6]。フィールドワークによる学修成果を授業に活かし、低学年次より段階的に教授することにより、地域で生活する人々とその家族の健康と暮らしを理解し、QOL維持・向上を支える能力や地域包括ケアシステム等を推進するための能力を強化することにつながる可能性があり、今後の「地域・在宅看護論」においても活用可能であることが示唆された。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は、コロナ禍により限定された実習環境で行ったフィールドワークが、学生にとってどのような学びにつながったのか明らかにした。今後はフィールドワークを「在宅看護論」および「地域・在宅看護論」のアクティブラーニング型授業としてとり入れ、基礎的知識・技法の習得を含めた段階的な授業設計の基に学修成果や教授法の検討を重ね、知見を蓄積することが課題である。

VI. 結論

コロナ禍の在宅看護論代替実習においてフィールドワークを行うことによる学修成果として、地域を捉える視点を獲得し、療養者・家族を生活者として捉える視点に基づき在宅看護を実践する必要性を学ぶことができた。さらに、地域力を高めるための連携と協働の必要性や臨床から地域への継続看護に取り組む必要性を理解し、看護の役割認識を地域に拡大させることにつながった可能性が示唆された。

学生はフィールドワークを通して、地域や暮らしを把握することが在宅看護の目的である療養者・家族のQOL維持・向上支援につながることを学んでおり、今後の「地域・在宅看護論」においても活用可能であることが示唆された。

謝 辞

学修成果を明らかにするプロセスにおいて、教員の振り返りや今後の課題を見出す貴重な機会を得ることができた。本研究を進めるにあたり、協力をいただいた学生のみなさまに感謝いたします。

文 献

- [1] 菅原尚美, 阿部幹佳, 高橋由美, 他: コロナ禍における遠隔授業を導入した演習・実習科目の教員の振り返りと看護学生の受け止め. 研究紀要 Seiyō. 2021; 13-1: 7-23.
- [2] 西嶋真理子: 地域看護実習における地域診

断の学習過程. 日本地域看護学学会誌, 2004, Vo.9, pp.98-105.

- [3] 金川克子編: 地域診断 技法と実際. 東京大学出版会. 東京. 2005.
- [4] 清水美代子, 永井道子: フィールドワークをとり入れた地域看護診断演習における学生の学び. 日本赤十字豊田看護大学紀要. 2015; 10-1: 120-134.
- [5] 清水信輔, 田口理恵, 榎本晃子, 他: 看護師の学士過程教育における地域看護診断演習の効果. 共立女子大学看護学雑誌. 2020: 23-32.
- [6] 一般社団法人日本看護学校協議会「看護師等養成所におけるカリキュラム改正事業」カリキュラム編成ガイドライン&地域・在宅看護論の教育内容.
http://www.nihonkango.org/report/pdf/report_200603.pdf
- [7] 水方智子: 地域・在宅看護論の位置づけと教育内容～地域を豊かにできる看護師の育成を目指して～. 2020.7.11～2021.3.31, 医学書院企画カリキュラム編成準備セミナー資料
- [8] 大谷弘恵, 水方智子, 木村緑, 他: カリキュラム編成の道のり 松下看護専門学校の挑戦(1). 看護教育. 2020; 16-6: 514-521.
- [9] 鹿野卓子, 大沼由香: 短期大学看護学生の地域共生型サービスでの学びーフィールドワークを通してー. 伝統医療看護連携研究. 2021; 2-2: 94-100.
- [10] 仙台市ホームページ 若林区まちづくり推進課. 若林 WALKER.
<http://www.city.sendai.jp/waka-katsudo/wakabayashiku/machizukuri/kankobutsu/machiaruki.html>
- [11] 臺有桂, 石田千絵, 山下瑠理子編: ナーシング・グラフィカ在宅看護論②在宅療養を支える技術, メディカ出版. 大阪市. 2020: 9-22.